

## 日露戦争～本日天気晴朗なれども波高し～

みなさんお待たせしました！今回は日露戦争についてです！太平洋戦争や第二次世界大戦はよく映画になったり、おじいちゃんに聞いたり、馴染みもあると思うのですが、実は日露戦争ってすごいんです！まず、なぜ日露戦争が起こったかですが、当時、世界で一番の経済力を誇っていた国はイギリスでした。理由はアジアやアフリカなどを植民地としていました。その勢力は世界の4分の1にまで達していました。その植民地との貿易で潤い、世界の経済、つまり「お金」を支配していたのです。しかしみなさんもお存じの通り、ロシアも領土の大きさでは相当なものです。でも「お金」の力はイギリスには敵いません。その理由はイギリスが船を使った貿易を年中行えるのに対し、ロシアは船が年中使えません。なぜでしょう？そう！寒すぎて海が凍るからです！港が凍るため船を出せない！じゃあもっと南の温かい国を侵略し、凍らない港を確保しよう！つまり南下政策はロシアにとって絶対に成し遂げたい目標だったのです。それに対しイギリスにとっては今の利益をおびやかす最大の敵であり、絶対阻止したいと考えていたのです。ロシアの南にある港は主に三か所です。西は黒海・オスマン帝国（トルコ）、真ん中はインド、東は朝鮮半島です。西の黒海はクリミア戦争でイギリスにはばまれ、港を手に入れることができませんでした。真ん中のインドはイギリスが抑えています。じゃあ東の朝鮮半島しかない！となります。しかし、その場所は日本にとって絶対防衛線なのです。お隣の朝鮮半島がとられれば、ロシアはどこからでも日本に攻め入ることができます。だから日本は絶対に朝鮮半島を守り切る必要がありました。ロシアの動きを警戒していたのは日本だけでなく、イギリスとさらにアメリカです。アメリカはアジアに植民地を多く持っていません。そこで、中国東北部の満州を狙っていました。そういった思惑が重なり、日露戦争は必然的に起こるのです。

前置きが長くなりましたが、今回の主役は秋山兄弟です！この二人は伊予松山（愛媛県）の生まれです。伊予と言えば、夏目漱石や正岡子規などの文豪をたくさん輩出した国ですね。兄の秋山好古は陸軍に騎兵部隊を組織し、日露戦争で当時世界最強の騎兵と言われたロシアの「コサック騎士団」を打ち破ります。弟の秋山真之は海軍の作戦参謀を担い、勝利は不可能と言われたバルチック艦隊を撃滅する丁字戦法を立案し作戦を指揮した天才だったのです。右の写真をみてください。2人ともとても男前ですよ。ヨーロッパ人かと思うようなきれいな目鼻立ちをしています。ちなみに正岡子規はこの秋山真之と同級生で一緒に東京に出てきた親友です。正岡子規は「俳句」という言葉や「野球」という言葉をつくった人と言われています。だから今でも愛媛は野球王国ですよ！

日露戦争は陸軍戦と海軍戦に分かれるのですが、まず、陸軍戦から見ていきましょう。戦場は主に二か所です。シベリア鉄道から南下してくるロシア軍とそれを阻止する日本軍との戦線（奉天など）と、ロシアの基地がある遼東半島の旅順（大連）です。この旅順が互いに最重要拠点だったのです。なぜなら、日露戦争は日本海軍の勝利のカギを握ります。日本は島国ですので、大陸での戦いには毎日大量の弾薬や食料を船で前線に送らなければ戦えません。しかし、もし日本海をロシア海軍に抑えられたら陸軍は補給が潰えて戦えず、この戦争に負けます。つまり、何があってもロシアの海軍を撃滅した上で、安全に陸軍に物資を届ける海のルートを確保することが、日本がこの戦争に勝つ唯一の方法なのです。そのロシアの艦隊は主に二つあります。一つは先ほど述べた旅順の基地にいる旅順艦隊です。そしてもう一つは大陸の西にあるバルト海に本拠地を置くバルチック艦隊です。これに対し、日本海軍の作戦は、バルチック艦隊が日本海に到着するには数か月かかる、その間に旅順艦隊を撃滅し、次に日本海にきたバルチック艦隊を撃滅するというものです。そ



秋山好古



秋山真之



正岡子規

れに対し、ロシアはバルチック艦隊が到着するまで旅順艦隊を温存し、到着と同時に日本の連合艦隊を挟み撃ちにするというものでした。だから、日本海軍は早く旅順艦隊を倒したいのですが、旅順艦隊は旅順のロシア軍基地から出てきません。それなら陸軍が旅順を陸から攻めるしかないと考えたので、陸軍はシベリア鉄道から南下してくるロシア軍を阻止しつつ、旅順の基地を落とす必要があったのです。だから、旅順は日露両軍の最激戦地になります。この攻略を任されたのは陸軍第三軍司令官の乃木希典大将です。ちなみに「乃木坂46」の乃木坂は乃木希典を祀った乃木神社から来ています。旅順要塞はコンクリートや鉄条網・塹壕など当時世界最先端の技術が使用されており、「永久要塞」と呼ばれていました。その名の通り、永久に陥落しない要塞ということです。それでも乃木希典は攻撃を敢行します。最初投入された兵力は5万1000人でしたが、次々と人数を投入し、最終的に死傷者は約6万人にのぼります。乃木希典の息子も二人参戦していたのですが、長男・二男ともに戦死しています。正に死闘でした。特に203高地と呼ばれる山での戦いは激戦を極めます。白襷隊（しろだすきたい）と呼ばれる決死隊3000人を投入しますが、これもほぼ全滅します。この状況を打開するために投入されたのが、28糎（センチ）砲という超巨大な大砲です。それをもって約半年かけて旅順要塞を陥落させます。そして203高地の山頂を観測台として28糎砲で港にいる旅順艦隊を砲撃し、壊滅させます。さらに旅順を陥落させた第三軍は奉天の日本軍に合流すべく北へ向かい、ロシア軍に打撃を与えます。結果ロシア軍は後退をしていきます。つまり、陸軍での戦いは何とか目的を達成することができました。

しかしまだ大きな戦いが待っています。そう！バルチック艦隊です！旅順艦隊は倒したが、バルチック艦隊が日本海に迫ってきています。もし、日本の連合艦隊が敗れることがあれば、陸軍は補給ができなくなり、日露戦争は負けます。その大事な一戦を任されたのが、乙旗「皇国の興廃この一戦にあり」という言葉で有名な連合艦隊司令官、東郷平八郎大将です。そして参謀には「天気晴朗なれども波高し」の電文で有名な秋山真之です。（調べてみよう！「天気晴朗なれども波高し」の意味は？）

日本海に侵入してきたバルチック艦隊に対し、日本は秘策を持っていました。それが参謀秋山真之の「丁字戦法」です。お互い一直線に艦隊を並べ、すれ違いざまに打ち合うのがよくある戦法なのですが、距離8000mで旗艦「三笠」を先頭に連合艦隊は左回頭を行い、「丁」の字のような形になります。丁字というよりは並行するような形になるのですが、何にせよこの作戦は大成功し、そこで、一気に先頭の旗艦「クニャージ・スヴォーロフ」を集中砲撃し、大打撃を与えます。ロシアの司令官ロジェストウエンスキーは重傷を負い、戦線を離脱します。このとき日本が開発した下瀬火薬が恐ろしいほどよく燃え、ロシア艦隊は大混乱に陥ります。その後も徹底的に攻撃を加え、夜間は駆逐艦が攻撃をし、最終的にバルチック艦隊は沈没21隻、被拿捕6隻、中立国抑留6隻、戦死4830名、捕虜6106名とほぼ壊滅したのに対し、日本の被害は小型の水雷艇3隻で戦艦や巡洋艦の沈没は一切ありませんでした。大艦隊同士の艦隊決戦としては現在に至るまで史上稀にみる一方的勝利となりました。

東郷平八郎はこの海戦中、安全な艦内には入らず、砲撃が当たる可能性がある艦橋に出て指示を出し続けます。最終的にロシア艦隊が降伏旗を掲げ、「打ち方やめ」の指示を出して艦内に戻った時、東郷の足跡が水に濡れず、くっきり残っていたそうです。つまり、砲弾が降りそそぐ中、東郷は一步も動かなかったのです。秋山好古もまた、銃弾飛び交う中、隠れることなく常に騎兵としての誇りを持って馬上で指示を出し続けたそうです。また203高地で死闘を繰り広げた乃木希典も、旅順のロシア軍が降参した際、降伏会見でロシアのステッセル中將に対し、例え敵であっても武人としてははずかしめを受けぬようにと帯剣を許しています。明治の軍人というのはやはり違いますよね！江戸時代に誇り高き武士として生まれたため意志の強さが尋常ではないですし、「武士道」精神が徹底されていますね。何より、写真を見れば感じると思うのですが、「目つき」が違いますよね！現代の一般人には絶対に真似できない「風格」だと思います。

みなさんも東郷平八郎や秋山好古のように人の上に立つときは「一番しんどい先頭に立つ」ということを体現して欲しいですし、乃木希典のように、例え敵として戦っても、勝敗が決した後は相手の「健闘」を称え、「尊敬」を持って接する人になりましょう。ちなみに司馬遼太郎の日露戦争を描いた『坂の上の雲』という小説は主人公が秋山兄弟と正岡子規なのです。とても面白いのですが、中学生の皆さんが読むには少し難しいかもしれません。でも安心してください！『坂の上の雲』はドラマ化されてとても観やすくなっていますので、ぜひ観てください。めちゃくちゃ面白かったです！



乃木希典



東郷平八郎

